

令和元年6月25日現在

機関番号：62608

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K00473

研究課題名(和文) 明治初年武家の北海道移住に関するアーカイブズの復元的研究

研究課題名(英文) Restoration research of historical archives about Hokkaido migration by samurai family in the early Meiji era

研究代表者

三野 行徳(MINO, YUKINORI)

国文学研究資料館・研究部・プロジェクト研究員

研究者番号：30714224

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、明治初年に北海道の分領支配に従事した武家や寺社など26の領主について、分領支配・移住前後の記録資料(アーカイブズ)を悉皆調査することによって、以下の2点の課題を検討することを目的とする。分領支配・移住によって分断状態にあるアーカイブズをヴァーチャルに復元する。分領支配・移住が惹起する北海道の地域社会の変容を研究する。本研究により、26の領主に関する基礎資料の収集を完了することができた。また、巨理伊達家に関して、伊達市・巨理町とで資料情報を共有する仕組みの基礎を作る事ができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、巨理(宮城県巨理町)から有珠郡(北海道伊達市)に移住した巨理伊達家を対象にアーカイブズの悉皆調査を行い、以下の成果を得た。巨理・有珠・札幌に残された資料を収集し、伊達市においてヴァーチャルに復元・公開する準備を整えた。巨理伊達家と有珠郡をモデルとした、武家の北海道移住と地域社会の変容に関する詳細な研究を蓄積した。また、分領支配に従事した26の領主について、可能な限り資料を収集し、分領支配の再検討のための基礎情報を整備した。併せて、以上の活動の多くの局面において、伊達市・巨理町の市民と共同で取り組み成果を共有したことも大きな成果である。

研究成果の概要(英文)：This study is intended to gather historical archives and informations about 26 samurai family which emigrated to Hokkaido in early Meiji era.

By this study, I completes the collection of basic data on the 26 samurai family. In addition, regarding the Watari Date family, we were able to create a mechanism to share data between Date City and Watari Town.

研究分野：日本近世史

キーワード：北海道移住 武家 アイヌ 分領支配 地域資料 資料保存 明治維新

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、代表者の前科研課題(「明治維新と武家の北海道移住に関する研究」研究活動サポート支援、2014-14)の成果を継承し、以下の課題を設定して開始した。明治初年の武家を中心とする北海道への集団移住は、「苦難の北海道開拓史」として、現在に至るまで確固たる歴史イメージを持って語られる。本研究は、明治維新後に北海道に領地を与えられた領主 26 家を対象に、移住者関連資料(情報)の悉皆調査を行い、移住過程と移住後のあらたな共同体の形成過程を検討することを目的とする。このさい、移住によって惹起される新たな「関係」と、

移住によって「分断」される「記憶装置 = アーカイブズ」に留意して検討を進めることを課題として設定した。移住を選択した領主は、移住にさいし、何らかの選別をしたうえでアーカイブズ(文物)を北海道へ持ち込んでおり、移住者に関する文物は、旧領地と北海道の移住先とに分断されて現存している。これらのアーカイブズは、中世末期から近世・近代の各家の記憶を伝える物である一方、移住にともなって移住先で惹起された新たな関係をも克明に記録している。また、この記録は、移住後、屯田兵や近代戦争、高度経済成長という過程を経て現在に至るまで、固有の役割を果たして伝来している。本研究は、特に現在に至る伝来過程に注目して 26 家のアーカイブズを悉皆調査することにより、「苦難の北海道開拓史」像を相対化し、北海道の地域に残された歴史遺産(情報)からあらたな歴史像を提起することを目指す。

本研究の前提として、現在北海道に暮らす人々にとって、武家の「苦難の開拓史」は、歴史のはじまりとして強い影響力を持ち、また公的な歴史において、「開拓史観」と呼ばれる武家の北海道移住に起原を置く歴史叙述が繰り返えしなされてきた問題がある。一方で、近代北海道において差別の対象となったアイヌの歴史からは、武家の開拓移住は「被侵略史」のはじまりでもあり、近代アイヌ史において、開拓史による差別的なさまざまな政策が遂行される起点として、武家の集団移住が位置づけられてきた。本研究は、北海道に残された(持ち込まれた)地域の歴史遺産から、この過程を再検証するものである。移住元と移住先とで分断状態にあるアーカイブズを復元し、公開する方法を検討することにより、北海道に暮らす誰もが、「苦難の開拓史」を相対化しあらたな歴史像を獲得する方法を模索するものである。そのためには、北海道に残された移住領主たちのアーカイブズの悉皆調査と、利活用のための環境整備が課題となる。

### 2. 研究の目的

明治初年の武家の北海道移住は、明治維新の政治過程によって敗者となった武家を中心に、多くの領主が支配する地域の大部分を維新政府に奪われ、当主のみならず、家臣も含めた一家あたり数百～数千人におよぶ武士集団が居所を失ってしまったことに端を発する。多くの武家は、北海道の未開拓地への開拓移住を請願し、北海道へ移住することとなる。結果、北海道に、武家が開墾し農業・漁業に従事する共同体が誕生することになる。この過程について、以下の3点が本研究の目的となる。

「関係史」の模索 上記の過程は、従来北海道「開拓史」として理解・表現されてきたが、移住先の地域には、多くの場合、既にアイヌによる集落が形成されていた。したがって、武家の北海道移住の過程は、「開拓史」ではなく、武家の開拓移住によって惹起される「関係史」として理解する必要がある。この関係には、寒冷地での生活や生産に不慣れな武家を、アイヌが援助する関係もあれば、既に築かれていたアイヌ社会を強奪する侵略の側面もある。また、近世段階でのアイヌと和人との関係が媒介となって移住が実現する側面もあった(三官寺・場所請負商人など)。「苦難の開拓史」ではなく、明治維新に伴う大規模移住によって惹起される「新たな関係史」としてこの間の歴史を検討する(方法を模索する)ことが本研究の第一の目的である。

開拓移住とアーカイブズ 江戸時代、家の記憶(家の歴史、行政の記録など)は、文書の作成・保管・参照という形で継承されてきた(アーカイブズ)。しかし、明治維新に伴う大規模移住は、物理的・人的に、アーカイブズをそのまま継承することを困難にする。明治維新によって「家の記憶装置」=「アーカイブズ」がどのように分断・継承されていくのか、その歴史的経緯を検討することがもう一点の目的である。北海道の近代史が「武家の開拓史」として理解されてきた背景には、アイヌが文字による記録を残さなかったこともある。しかし、開拓移住に係わる武家のアーカイブズには、アイヌとの関係を示す記録が多く残されている。武家の開拓移住の記憶のなかからアイヌとの関係の記憶を呼び覚ますことにより、は史料的に可能とする方法でもあり、とは、密接な関係を持っている。

地域の歴史意識と北海道移住・アーカイブズ 現在北海道に暮らす人々にとって、「苦難の開拓史」は、歴史のはじまりとして強い影響力を持つ一方、その過程で差別の対象となったアイヌの歴史からは「被侵略史」でもある。本研究は、の視点から、北海道に残された(持ち込まれた)地域の歴史遺産から、この過程を再検証するものである。移住元と移住先とで分断状態にあるアーカイブズを復元し、公開する方法を検討することにより、北海道に暮らす誰もが、「苦難の開拓史」を相対化しあらたな歴史像を獲得する方法を模索するものである。そのためには、北海道に残された移住領主たちのアーカイブズの悉皆調査と、利活用のための環境整備が課題となる。

対象の詳細 本研究において具体的に分析対象とするのは、仙台藩家門巨理伊達家を中心とする仙台藩旧家臣及び東北諸藩と、江戸幕府旗本富江五島家や熊本藩など、北海道に領地を与え

られた九州の武家を中心とする合計 26 の領主である。主たる分析対象である巨理伊達家は、巨理（宮城県巨理郡巨理町）に約 2.3 万石の領地を持ち、戊辰戦争敗戦後に北海道胆振国有珠郡（北海道伊達市）の開拓を許可され、明治 3 年より移住を行う。他の仙台藩旧臣も、片倉家など 7 家が北海道移住を行っている。これら移住武家には家祖伊達成実や片倉小十郎以来のアーカイブズが残されており、何らかの選別を経て移住先へもたらされた。また、移住に同行した家臣も、家中で何らかの選別を経たアーカイブズを移住先へ持ち込んでいる。一方で、巨理・白石などに残してきたアーカイブズ、移住に同行しなかった家臣の家のアーカイブズ、北海道移住後、さらに屯田兵などで移住した家のアーカイブズが存在する。これらのアーカイブズのうち、たとえば巨理伊達家の場合、家伝来のアーカイブズは伊達市へ寄贈され保存・管理されているものの、その他のアーカイブズについては、地理的な制約からも、断片的にしか調査・研究されず、移住に伴うアーカイブズの移動の経緯および移住前後のアーカイブズを有機的に関連させた研究はなされていない。また、巨理伊達家の移住先の有珠郡には、近世後期に有珠善光寺が設立されてアイヌの教化にあたっており、善光寺を仲介として、巨理伊達家の移住をアイヌは積極的に支援したと伝わるが、具体的な様相は不明である。有珠善光寺には、未研究のアーカイブズが多数残されており、関係史を構想する上での恰好の素材である。そこで 移住の経緯を、アイヌ集落、有珠善光寺も視野に入れ、関係史として検討する。その実現のため、伊達市、巨理町、白石市、登別市、札幌市、仙台市、京都府と、関連のある集団や組織の史料を悉皆調査し、アーカイブズの分断の経緯の解明と復元の視点を踏まえて検討する。以上の仙台藩旧臣の事例は、明治維新に伴って惹起された武家の大規模移住に伴う問題群を考えるうえでのモデルケースとなりうる。本研究を通じて、明治維新と武家の北海道移住を、「開拓史」ではなく「関係史」として描く方法を模索するとともに、地理的に分断状態にある（旧藩地と北海道）関連アーカイブズを復元し、ヴァーチャルな状態で現在暮らす人々の元へ届け、利活用の道を模索することが本研究の課題である。

### 3. 研究の方法

本研究では、明治初年に北海道分領支配を許された 26 の領主について、北海道移住とその後の共同体形成過程の検討を、現在にまで残された記録（アーカイブズ）の復元的検討から行う。そのためには、現地での所在資料の調査・整理・研究が欠かせない。具体的な調査地域は北海道（伊達市・札幌市・登別市など）、宮城県（仙台市・白石市・巨理郡巨理町など）、東北地方（盛岡市・鶴岡市など）の資料保存機関および個人宅である。年 2・3 回程度、それぞれの地域において、資料整理・目録作成に取り組み、そのうえで、所蔵者・関係機関と連携をとりながら研究を進め、了解が得られた段階で、資料情報の公開、成果の発表を行う。資料調査にあたっては、これまでの蓄積のある巨理町-伊達市について、研究・成果の公開を深めてモデルを構築する一方で、26 の領主それぞれについて資料調査を行い、武家の北海道移住に関する研究基盤の整備を行う。

宮城県巨理町-北海道伊達市 巨理伊達家については、これまでの蓄積を踏まえて以下の 3 点を課題として設定する。

家臣団所蔵資料の調査・整理・資源化 巨理伊達家に伝来する資料は既に整理・公開されているが、伊達市・巨理町に伝来する家臣団所蔵資料は未整理であり、研究もされていない。本研究では、伊達市子孫家に伝来する巨理伊達家家老田村家文書について、整理・保存措置・目録記述・撮影を行うことを主要な課題とした。また、巨理町に伝来する家老志賀家文書についても、研究を進める。また、その他の家臣団所蔵資料について、整理・保存・目録記述・撮影を進める。

巨理伊達家をモデルとした「関係史」の模索 巨理伊達家および家臣団の家、開拓使資料などの研究を進め、「開拓使」とも「被侵略史」とも異なる「武家の北海道移住が惹起するあらたな関係史」として、明治初年の武家の北海道移住を研究・叙述する。

資料・情報の共有・還元 の方法と関わり、本研究では、研究活動のプロセスを市民と共有することを目指す。具体的には、北海道伊達市および巨理町において、資料調査・整理などの活動を市民協働で行うとともに、研究成果を市民に還元する具体的な取り組みを行う。

その他の領主 明治初年に北海道に領地を与えられた領主は 26 家である。そのうち、巨理伊達家を除く 25 の家については、基礎的な資料情報を収集するとともに、可能な限り関連資料を悉皆調査する。26 の領主についての基礎資料は、北海道立文書館所蔵開拓使公文書によって、移住前後の過程をおおよそ知ることができるため、まずは同館所蔵の資料をすべて把握する。併せて、地域に残る史料から関連資料を探索し、調査・研究を進める。具体的には、関連資料の所在が確認できている片倉家、庄内藩、一関藩、盛岡藩および、明治 10 年代に移住した徳島県平民鎌田家に伝来する資料である。

### 4. 研究成果

宮城県巨理町-北海道伊達市 巨理伊達家についての成果は、以下の 3 点にまとめることができる。

巨理伊達家家老田村家資料の整理 伊達市において調査を重ね、巨理伊達家家老田村家に伝来する田村家資料について、整理（番号付与）・保存措置（中性紙封筒・保存箱）・目録作成・デジタル化を行った。田村家資料は古文書を中心に写真・武器武具・書画などからなり、2000

点を超える大部な資料群である。本研究では、全点の整理・保存措置・デジタル化を行うとともに、古文書については詳細な目録記述を行った。これらの取り組みにより、田村家資料については今後目録を刊行する準備を整えることができた。

資源化 巨理町には、家臣団に伝来した資料群がある。このうち、林奉行などを勤めた二階堂家に伝来した二階堂家文書、家老志賀家に伝来した志賀家文書について、巨理町と協力して整理・研究を進めた。具体的には、巨理町で編さん中の巨理町史資料編に協力し、二階堂家文書の目録および史料集の編集を行った。また、同資料編にて、志賀家文書の目録・資料編の準備も行った。二階堂家文書は2019年度、志賀家文書は2021年度に刊行される予定である。また、二階堂家文書・志賀家文書の翻刻は伊達市在住の市民グループが担っており、巨理町・伊達市・市民グループ・科研チームとの協働体制を構築することができた。

成果の還元 仙台郷土研究会・東北大学・伊達市などで市民も含む研究会を開催し、研究報告を行うことにより、研究成果の市民への還元に勤めた。また、伊達市-巨理町での取り組みを広く資料保存・継承の文脈へ位置づけるべく、積極的に研究発表を行った。併せて、伊達市で編さんされた市民向けの概説本『北の大地と生きる - 海を渡った巨理伊達家臣団 - 』に企画段階から参画し、全面的に監修を行った。分担者の伊達元成が学芸員として勤務する北海道伊達市は、2019年4月に博物館「だて歴史文化ミュージアム」を開館した。伊達元成は博物館の担当であり、科研の成果を市民に還元し、市民協働で活動に取り組む「場」となるよう、新博物館のありようを検討することができた。今後、この場を拠点として、これまでの取り組みで得られた史料情報の共有の方法を構築することにより、アーカイブズのヴァーチャルなレベルでの復元及び、市民への還元を実現していくことになる。

他の領主について 巨理伊達家以外の北海道に移住した領主については、北海道立文書館にてほぼすべての基礎資料の撮影を行い、概要をまとめることができた。併せて、地域に伝来した関連資料について、以下の成果を得ることができた。

庄内藩-虻田町 虻田郡に領地を与えられた庄内藩(大泉藩)について、鶴岡市郷土資料館にて調査を行い、多くの関連資料を確認することができた。同藩は幕末にも北海道に領地を与えられており、幕末の北海道支配関連資料、明治初年の虻田町支配関連資料を確認したうえで、後者について全点撮影を行い、分析を進め、科研内研究会において、研究報告を行った。

一関藩-白老町 白老郡に領地を与えられた一関藩について、研究協力者の菅原孝明(一関市学芸員)が北海道大学・北海道立文書館所蔵の関連資料の調査・研究を行い、科研内研究会にて研究報告を行った。

盛岡藩-有珠郡 幕末に有珠郡を管轄した盛岡藩について、研究協力者清水詩織が盛岡市に伝来する関連資料の調査・研究を行い、科研内研究会にて研究報告を行った。

片倉氏-登別市 幌別郡に領地を与えられた仙台藩士片倉氏について、研究協力者平塚理子(登別市学芸員)が、登別市・北海道立文書館・北海道大学・北海道博物館に伝来する資料を調査・研究し、科研内研究会にて研究報告を行った。

石川氏-室蘭市 室蘭郡に領地を与えられた仙台藩士石川氏について、室蘭市に伝来した石川氏家臣添田家文書の調査を行い、主要史料の撮影と分析を行った。

鎌田家-壮瞥町 明治10年代から20年代にかけて壮瞥町の開拓を行った、徳島出身の鎌田家に伝来した史料について、壮瞥町の協力を得て、整理・全点撮影を行った。

研究のまとめ 以上の活動・調査に加えて、本研究では、巨理伊達家の開拓移住について、幕末の有珠郡の支配から明治後期の移住までを含めて、分担者・協力者で分担して研究を進め、年に1~2度の科研内研究会にて報告を行った。具体的なテーマは以下の通りである。

幕末の有珠郡支配・海防 / 幕末~明治期の有珠郡の寺社 / 北海道分領支配の政治史的分析 / 分領支配の比較検討(虻田・室蘭・白老) / 明治初年有珠郡の教育 / 明治中後期の巨理伊達旧臣の北海道移住 / 研究成果の市民への還元

以上の研究成果は、論文集として2019年度に発表するべく、準備を進めている。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計6件)

1. 三野行徳「多摩の自治体史編さんと地域の歴史意識」、『関東近世史研究』(第81号)、査読無、pp.39-53、2018年
2. 工藤航平「新刊紹介『渡辺尚志編『アーカイブズの現在・未来・可能性を考える - 歴史研究と歴史教育の現場から - 』」、『地方史研究』(393)88-89、2018年
3. 久留島浩、「『ミュージアムと未来をつくる』 - ミュージアムの果たす役割と可能性 - 」、『Newsletter【噴火湾文化】』、査読無、12号、2018年、pp.3-5
4. 三野行徳、「海を渡った記録と記憶 - 北海道に伝来した巨理伊達家中のアーカイブズ - 」、『まほら』、査読無、2016年、88号、pp.46-47
5. 三野行徳、「書評『幕藩政アーカイブズの総合的研究』」、『アーカイブズ学研究』、査読無、21号、2016年、pp.113-121
6. 伊達元成、「兜プロジェクトマッピング; 全周投影を用いた文化財展示の提案」、『映像情報メディア学会技術報告』、査読無、40-11、2016年、pp.299-302

〔学会発表〕(計5件)

1. 工藤航平「都道府県公文書館所蔵の歴史的公文書点数推移にみる現状と課題」、日本歴史学協会・日本学会議史学委員会 第23回史料保存利用問題シンポジウム、2018年、駒澤大学
2. 三野行徳「海を渡った記録と記憶 - 北海道に伝来した巨理伊達家中の資料 - 」、仙台郷土史研究会総会(招待講演)、2017年、戦災復興記念館
3. 工藤航平「伊達市に伝わる古文書資料から読み解く幕末の伊達家とその家臣」、東北大学東北アジア研究センター・伊達市噴火湾文化研究所 第8回学術交流連携講演会(招待講演)、2017年、東北大学
4. 伊達元成、「みんなで守る地域の歴史資産 地域の歴史・文化を後世へ受け継ぐための保全措置 」、第56回北海道博物館大会、2017年、帯広百年記念館
5. 久留島浩、「ミュージアムと未来をつくる 」、だて歴史文化ミュージアム スタートアップ講演会(招待講演)、2017年、だて歴史の杜カルチャーセンター

〔図書〕(計2件)

1. 『北の大地と生きる - 海を渡った巨理伊達家臣団 - 』(監修:三野行徳・工藤航平・久留島浩) 国土社編集・制作、北海道伊達市教育委員会、2019年
2. 『社会変容と民間アーカイブズ - 地域の持続へ向けて - 』(工藤航平「北海道所在の民間アーカイブズの特質 分割管理された「移住持込文書」の伝来と意義 」、勉誠出版、2016年

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：久留島浩

ローマ字氏名：KURUSHIMA HIROSHI

所属研究機関名：国立歴史民俗博物館

部局名：大学共同利用機関等の部局等

職名：館長

研究者番号：30161772

研究分担者氏名：伊達元成

ローマ字氏名：DATE MOTOSHIGE

所属研究機関名：伊達市噴火湾文化研究所

部局名：その他部局等

職名：学芸員

研究者番号：70620897

(2)研究協力者

研究協力者氏名：工藤航平

ローマ字氏名：KUDOU KOUHEI

研究協力者氏名：平塚理子

ローマ字氏名：HIRATSUKA MICHIKO

研究協力者氏名：菅原孝明

ローマ字氏名：SUGAWARA TAKAAKI

研究協力者氏名：清水詩織

ローマ字氏名：SHIMIZU SHIORI

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。